

2. 留学生相談部門

留学生相談部門の活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3) 留学を希望する日本人学生、及び4) 留学生の問題を解決するために連携する教職員や地域社会の人々である。2004年度の留学生相談部門の業務は、留学生相談部門教員（横田雅弘）と留学生センター兼務で各研究科に所属する留学生専門教育教員（商学研究科：太田浩、経済学研究科：井村倫子、法学研究科：柘植道子、社会学研究科：河野理恵）が担当した。

留学生相談部門が提供する教育サービスは、1) 学生の相談に応じ、問題解決を図る「相談活動」と、2) 学生の適応上の問題を未然に防いだり、異なる文化への認識を高めていく「予防・開発的活動」、3) 奨学金応募の支援や学業面での相談の「学習支援」の三つに分けられる。相談活動の中心は、アドバイジングとカウンセリングであり、治療的な面接から情報提供まで幅広い活動が含まれる。予防・開発的活動には、a) オリエンテーション・プログラムやガイドブックの出版、各種チューター制度の運営など留学生の異文化不適応を予防する活動、b) 見学旅行、授業など、留学生の日本社会・文化あるいは大学制度への理解を促す活動、c) コミュニティによる生活支援を促進する活動、d) 学生国際交流誌『Bridges』の編集、e) 日本人学生のための留学フェアの開催や海外留学ならびに留学生理解に関する授業、f) 教職員に留学生の現状を伝え、大学の受け入れシステムを改善する活動などがある。

1 相談活動

1) 相談室の時期、時間及び担当者

夏学期に対応した開室日は3月28日（月）～8月1日（月）であり、冬学期に対応した開室日は9月26日（月）～2月10日（金）であった。これらの期間の月曜日～金曜日の午前10時～午後1時、午後2時～午後5時には表1の担当表に基づいて留学生相談室を開室した。今年度からは、長期休暇中も相談室を開室したが、表1に基づく担当ではなく、夏期、春期休業のそれぞれにシフトを作成して開室した。8月2日（火）～9月22日（木）までの開室日37日間は、横田（17日）、河野（5日）、井村（3日）、西谷（5日）、石黒（2日）、今村（4日）が担当した。日本語教育部門担当教員（西谷・石黒・今村）も加わったのは、夏期休業期間の開室決定が休業直前であったために、相談部門担当教員だけの担当が困難であったことによる。春期休業期間の2006年2月13日（月）～3月24日（金）の開室日30日間は全て相談部門担当教員で担当した。担当は横田（12日）、太田（4日）、井村（4日）、河野（4日）、柘植（4日）である。

2. 留学生相談部門

表1：相談室担当者の一覧

曜日	10時～13時、14時～17時
月	横田雅弘
火	太田浩
水	井村倫子
木	河野理恵
金	柘植道子

2) 来談状況の分類

① 相談領域

表2は2005年度の来談状況の分類である。一年間でのべ1,606件（昨年度1,408件）の相談を受け付け、のべ1,629名（昨年度1,504名）の来談者があった。昨年度よりもかなり増加している。来談者数が相談件数よりも多いのは、複数で来室したものを1件とカウントしているためである。

今年度相談件数が一番多かった領域は、昨年同様「チューター」（243件、15.1%）である。これは、留学生と日本人学生によるチューター申込みの登録である。4番目に多い「チューター・オリエンテーション」（108件、6.7%）を含めて、チューター制度に関するものが全体の21.8%となっている。これは厳密には相談とは言えないが、予防的・開発的な施策の一環として、また日本人学生の教育的な面ももつ活動である。チューター・オリエンテーションとは、チューター制度の有効性を高め、日本人学生と留学生のトラブルを防止するために行っているものであり、チューター候補者と留学生の両者を相談室に呼んで、『日本人学生の海外留学と外国人留学生との交流のための海外留学・留学生交流ハンドブック』をテキストとし、チュートリアルの内容の確認、チュートリアル実施にあたっての注意事項、問題が起きた場合の対処などについて指導している。なお、センター学生のチューター6名に対して、日本語教育のオリエンテーションを4月上旬におこなった。（他、4名については言語社会研究科の第II部門日本語教育学専攻のため特にオリエンテーションはおこなっていない）。

経済に関する相談は次のように下位分類されている。「経済」（3件、昨年度30件）は大きく減少しているが、「減免」（授業料減額免除）申請のためのサインを求めて来た者は増えている（140件、昨年度125件）。「奨学金」（52件、昨年度31件）と「推薦書」（37件、昨年度34件）は分けられているが、推薦書の多くは奨学金申請のためのものである。推薦書を実際に書いた場合には「推薦書」として分類している。アルバイトに関するものでは、「アルバイト」（8件、昨年度13件）の相談と資格外活動許可申請のための「副申請」（99件、昨年度70件）が含まれる。以上、経済に関係する来談件数を合計すると、287件（昨年度303件）となる。なお、「住居」（107件、昨年度129件）と分類されている内容にも、経済的な理由で訪れた者が含まれる。経済に関する相談は、相談内容については生活設計の建て直し、アルバイトや奨学金紹介などになるが、解決は難しいものが多い。心理的

に追いつめられていることが多いので、話を聞いていくことでそれでも何とかやっていこうという気持ちをもってもらうことが大切である。話の内容には、どうして私は減免や奨学金がもらえないのかという制度や審査に対する不満が多くの場合にあり、まずはそれを聞いていくことになるが、なかなか難しい問題である。中には、もともと入学時から、しっかりと資金計画がなかったのではないかと思われる事例もある。

「その他」を除いてチューターの次に多かったのは「住居」（107件、昨年度129件）に関する相談である。小平国際学生宿舎も全館オープンして、フロアリーダー制度も整ってきたが、国際交流会館も含めて、このような学生スタッフとの連携は常時さまざまな形で必要となっている。フロアリーダーとの連携では、メールによる指示や相談も多い。

学内の国際交流・異文化交流誌である『ブリッジス（Bridges）』の編集会議や指示に関して来談した件数（38件、昨年度48件）は、相談というような内容ではないものも多いが、原稿を書く留学生が多く、日本語で文章を書いたりインタビューしたりする勉強の一部になっている。2005年度も3月に発行した。

健康の問題には、身体的な問題（13件、昨年度10件）と心理的な問題（23件、昨年度37件）がある。心理的な問題については、相談室ではなく、研究室で相談を受けたケースが実際にはここに挙げられたもの以外にもある。研究室相談についてもきちんと統計をとるように心がけたが、まだ徹底されていないところがある。心理的な問題については、他の項目と比べると複数回来談するケースが多い。

近年大きく増加している項目に、教育（内容）すなわち授業等の内容に関するものがある。2年前は30件であったが、昨年度は79件、今年度は96件となった。「留學生理解と国際教育交流」、「海外留学と国際教育交流」などの授業が浸透して日本人学生からの質問なども多くなったためではないかと思われる。日本人学生からの留学相談も2年前は35件、昨年度は65件、そして今年度は91件に増加した。

「行事申込」（14件、昨年度22件）とは、毎年5～6回開催している通常20名での日本探訪旅行の補欠者の申込みや、旅行のオリエンテーションに来られなかった学生（無断での欠席は辞退とみなしている）の個別オリエンテーションなどである。「地域」（26件、昨年度24件）とは、地域ボランティアの方からの相談や打ち合わせが含まれる。学生からのホストファミリーに関する質問や紹介もここに入る。

また、海外からも含めてメールによる相談や問い合わせがますます増加している。相談室担当者は、担当曜日以外にも多くの相談に対応しているといえる。

2. 留学生相談部門

表2：2005年度の月別来談者状況（件数）

順位		2004年										2005年			計 (件)
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
1	言語				1									1	2
2	住居	24	17	16	9	1		9	5	5	9	6	6	107	
3	生活	2		2			1	2						7	
4	進路	4	5	6	7	10	11	8	8	5	2	6	10	82	
5	履修	30	5	1	2	1	1	9	1			1		51	
6	就職	4	2	5						3	1	2	1	18	
7	教育	7	14	18	21	1		11	7	1	6	5	5	96	
8	オリエンテーション	16	3		4		3	2				2	6	36	
9	チューター	57	33	20	21	1	8	30	45	13	5	4	6	243	
10	チューター・オリ	31	22	9	4			16	17	5		2	2	108	
11	経済		2							1				3	
12	アルバイト			1				3	2	1		1		8	
13	副申書	23	18	10	1	6	4	7	6	4	6	11	3	99	
14	減免	67	3	2			15	52					1	140	
15	奨学金	12	7	2	3			4	6	6	3	1	8	52	
16	推薦書	10	8					1	3	10	2	1	2	37	
17	人間関係		2		1			3	7		2	1		16	
18	健・身体	1	1	2	2		1	5			1			13	
19	健・心理	3	2	3	1	1	1	3	1		3	3	2	23	
20	行事申込			2	6				2	1		2	1	14	
21	在留資格	3	5	4		6	1	2	2	1	2	3	7	36	
22	留学相談	6	6	6	24	3	1	13	7	5	6	6	8	91	
23	ブリッジズ	3	3	1	7	5		10	3	2	1	1	2	38	
24	地域	4	3	2	4	2	1	6	1			1	2	26	
25	その他	14	27	23	12	8	12	20	28	17	19	8	19	207	
26	会議	3	6	8	13	6	5	2	2	1	3	3	1	53	
	合計	324	194	143	143	51	65	218	153	81	71	70	93	1,606	

② 来談者の内訳（表3）

全来談者のうち、留学生はのべ939人（57.6%、昨年度876人）、日本人学生はのべ397人（24.4%、昨年度349人）、教員はのべ71人（4.4%、昨年度39人）、職員はのべ118人（7.2%、昨年度80人）、学外者（学生を除く）はのべ104人（6.4%、昨年度160人）であった。先の留学生の数に含めたが、学外からの留学生・就学生数はのべ35人（昨年度51人）であった。

留学生の来談者のべ数のうち、422人（44.9%）すなわち半数弱が学部生である。学生総数では学部留学生は大学院留学生の約4分の1なので、この比率はかなり高い。大学院生は、すでに日本で学部時代を過ごしている人も多いこと、学部の1～2年生は指導教員がいないので授業料免除申請や奨学金などについての推薦を求めて来室すること、学部留学生はチューター制度を活用する人が多いこと、日本人学生との交流やブリッジズの編集などについて学部留学生の方が積極的であることなどがその理由であろう。

修士課程の留学生の来談はのべ170人と留学生全体の18.1%を占める。大学院重点化が完了して修士課程の学生数が大きく増加し、そのために奨学金の受給が難しくなって経済的な問題を抱える学生が少なくない。経済的に厳しい中で、単位の修得、修士論文の執筆、卒業後の進路と数多くの課題をこなす必要がある。心身の健康に関する来談が一番多いのが修士課程の学生である。

研究生ののべ来談者数は127人で、昨年度の72人から大きく増加した。留学生来談者に占める割合は13.5%である。修士課程や博士課程の入学準備期である研究生の訴える問題は深刻なものが多い。

日本人学生の来談者の70.3%が学部生で、その比率は留学生の学部生の比率に比べても更に高いが、チューターのオリエンテーションを受けに来た学生の多くが学部生であること、教育内容や留学相談について来室した学生も学部生が多いことが主な要因である。それ以外にも、留学相談やブリッジスの編集に積極的であることから学部生の割合が高くなっている。

なお、相談室には本学の留学生、日本人学生の他に、教職員（119人、来談者のべ人数の7.3%：教員71人、昨年度39人、職員118人、昨年度80人）からの相談や教職員とともに問題に対処するための相談があり、いずれも増加している。また、学外（104人、昨年度211人、同6.4%）からの相談は、地域で留学生を支援しているボランティアが最も多いが、他にも行政機関の担当者、一橋大学受験希望者などからの相談がある。

表3：来談者の内訳

種類		人数
留学生	学部生	422
	研究生	127
	修士課程	170
	博士課程	64
	センター生	19
	日本語研修生	15
	交流学生	86
	聴講生	1
	学外	35
日本人学生	学部生	279
	修士課程	47
	博士課程	71
	聴講生	
教員		71
職員		118
学外		104
合計		1,629

2 予防・開発的活動

1) オリエンテーション・プログラム

4月及び10月入学の大学院生、学部生、研究生、交流学生、日本語研修生(センター学生)、日本語日本文化研修生を対象にオリエンテーションを行った。なお、オリエンテーションに欠席した留学生については留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。例として2005年度夏学期の学部学生と研究生のオリエンテーション・スケジュール(日本語)を下記に示す(表4、表5)。研究生のオリエンテーションは同時に英語でも実施した他、別途交流学生用の英語によるオリエンテーションとセンター学生用の英語によるオリエンテーションも実施した。

2) 異文化交流誌『Bridges』

『Bridges』21号(編集長:井村、副編集長:横田)を編集し、2006年3月21日に発行した。表紙は前号同様、一橋大学美術部が担当した。本号では、特集を「EUと日本のこれから」と題し、駐日欧州委員会代表部やEUからの留学生へのインタビュー、アンケート調査結果報告、EUIJの拠点としての一橋大学など、多面的な情報が掲載され、充実した号となった。さらに、2004年に設立された一橋大学北京事務所の活動や、近々導入が決定している次世代のTOEFL(R)テストに関する記事など、新入生に向け新しい情報を発信することができた。

3) 学内留学フェア

日本人留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした留学フェアを5月25日(水)に学内において実施し、約80名の日本人学生が参加した。交流協定校の紹介は交流学生及び帰国留学生が担当した。なお、全体会においては学外から、カリフォルニア大学東京スタディセンターの高橋香世氏、ボストン大学リエゾンオフィスの寺岡満紀子氏、オーストラリア政府国際教育機構オーストラリア大使館の市川智子氏をゲスト講師として招き、各大学の概要と受け入れ体制、留学における心構えなどに関する講義を依頼した。また帰国留学生の代表として、マンハイム大学(ドイツ)に派遣留学経験者である河野雄三さん(商学部)が留学から得た経験についてのスピーチを行った。分科会においては各ブースに分かれての説明会が行われ、学生交流協定校19校のほか、ボストン大学とオーストラリア大使館が各大学の特色などの説明に当たった。

4) 国際資料室のチューター

個別チューターとは別に、全ての留学生が気軽に日本語のチェックや講義内容の疑問点などを相談できるように、国際研究館1階の国際資料室にチューターが常駐した。チューターは大学院生に依頼し、月曜日から金曜日の10時から1時、2時から5時まで、留学生や日本人学生からの相談を受け付けた。担当者の一覧を表6に示す。一橋大学の常駐のチューター・システムに関する報告と分析は紀要第7号に掲載されているので、そちらをご参照願いたい。

表6：国際資料室担当者一覧

曜日	氏名・所属		
月	王 津	(社会学研究科博士課程)	4月～9月
	ウヨンビリゲ	(言語社会研究科博士課程)	10月～3月
火	坂本 徳仁	(経済学研究科博士課程)	4月～3月
水	記田 路子	(社会学研究科博士課程)	4月～3月
木	片山 慶隆	(法学研究科博士課程)	4月～9月
	鶴田 綾	(法学研究科修士課程)	10月～3月
金	北村 真琴	(商学研究科博士課程)	4月～3月

5) 留学生日本探訪旅行

2泊3日の「留学生日本探訪旅行」を企画・実施した。8月に隠岐島海士町（20名参加・引率者：横田・新見）、愛知万博（20名参加・引率者：太田・坂井）、京都（20名参加・引率者：井村・本江）3月には伊豆大島（30名参加・引率者：河野、柘植）を実施した。

6) TOEFLセミナー

学生交流協定校の語学要件（TOEFLスコア）が引き上げられていること、次世代TOEFLの実施が予定されていることから、日本でのTOEFL事務局であるCIEEを招いて、TOEFLのセミナーを5月18日に実施した。40名の参加があり、当初の予想を下回ったが、これは2005年1月12日に本学で初めて行った同セミナーに80名の参加があり、今回のセミナーまで間隔が短かったためであろう。

7) 小平キャンパス国際学生宿舎における活動（留学生指導主事、フロアリーダー会）

小平キャンパスに国際学生宿舎では、フロアリーダー会の宿舎チューターと留学生指導主事がリエゾンとなって、小平市の国際交流団体の協力の下、以下のとおり留学生居住者のための日本文化体験イベントを行った。

華道・茶道教室（協力：国際交流さくら会）：全10回（11/26、12/3、12/10、1/14、1/28、

2/4、2/18、2/25、3/4、3/11）、毎回10名程度の参加者

新春餅つき大会（共催：小平市国際交流協会）：1/21、約100名の参加

2. 留学生相談部門

また、留学生指導主事のスーパーバイズの下、フロアリーダー会（宿舎チューターを中心に）の主催で学生間の交流を目的とした「ウェルカムパーティ」（4/16と10/15）、「韓国DAY」（6/17）、「BBQ親睦会」（7/22）、「海水浴ツアー」（8/9）、「ハロウィンパーティ」（10/29）、「クリスマスパーティ」（12/17）、「スキーツアー」（2/19-22）、「スケートツアー」（3/6）を実施した。さらに、プロの落語家を招いて「落語を聞いて日本文化に触れよう」（12/8）と自然災害の多い日本で生活するために必要な知識と意識を高めるためのイベントとして「防災ツアー」（11/19）も行った。

今年からは、ウェルカムパーティと同日に宿舎チューターをファシリテーターとして、「留学生居住者のためのガイドランス」も実施されるようになった。新規入居者を含むすべての留学生入居者を対象とし、日英2ヵ国語で行った。

8) 短期海外研修（モナッシュ大学）

「本学学生の国境をまたぐ能力育成プロジェクト」として、平成17年度「教育研究改革・改善プロジェクト経費」（通称：学長裁量経費）を受け、短期海外研修を2月25日から3月26日まで、パイロット・プロジェクトとして、豪州のモナッシュ大学にて実施した。実際の現地での研修、ホームステイ、研修旅行等は、モナッシュ大学のAACCE（Australia Asia Center for Education Exchange）によって運営された。実施にあたっては、広報、オリエンテーション、ロジスティック面でCIEE（国際教育交換協議会）の協力を得た。17名の学部課程1、2年生が参加し、職員2名も参加した。また、ほぼ同時期にモナッシュ大学に来ていた東京工業大学及び大阪大学の学生が現地での研修とともに参加した。本研修では、英語によるコミュニケーション能力の向上だけでなく、豪州の社会、政治経済、文化を理解すると共に、異文化体験を通じて、それを理解し、適応するための（異文化間コミュニケーション）スキルを学ぶことを目的とした。また、参加学生は滞在中に各自がテーマを持って、研究プロジェクトをまとめ上げ、最終日に発表を行った。

本研修は、2回の研修説明会（11/16、11/24）を経て、参加学生を募り、研修前に3回のオリエンテーション（12/20、2/1、2/17）を実施した。オリエンテーションでは、異文化理解、危機管理、渡航手続き、現地での生活情報などを中心に取扱った。研修中は、服部企画調査役が現地での実地調査（2/25-3/26）を行った。帰国後は研修のレビュー（4/4）を行い、その際、参加学生に対して、アンケート調査を行った。今後、当該アンケート調査の集約と分析を行い、服部企画調査役の実地調査レポートと共に本研修の報告書をまとめたい。また、参加学生は別途、「短期海外研修報告書」を作成しており、7月下旬発行予定である。

9) く にたち地域国際交流ネットワークとの協力

国立地域の複数の国際交流ボランティア組織が実施している外国人のためのサポート活動(日本語講座、ホームステイ・プログラム、生活相談等)に協力した。「ホストファミリーく にたち」とASSISTの協力のもと、ホームステイを行った。また、「まほうのランプ」との協力のもと、国際交流会館の倉庫を利用し、留学生のための日用品提供の整理を開始した。

10) 授業

相談部門にかかわる教員が担当した授業は以下の通りである。

①日本語研修コース

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
日本の社会と文化 ～異文化体験ゼミナール～ (柘植)	2コマ /週	日本語研修生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得する。	4月コース 10月コース 各64時間

②教養教育科目

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
まちづくり 2005 夏・冬 (林・横田)	1コマ /週	学部学生	「教育と思いやり」をキーワードに国立市の富士見台地区の再開発を授業として実施した(特色 GP 関連授業)。	それぞれ 夏・冬学期 開講 各30時間
留学生のための社会科学 ゼミナール I (井村)・II (河野)	1コマ /週	学部学生	スタディースキル(ノートテキング、リサーチ方法、速読、レポート作成)を中心に大学生活で必要な基礎能力についての講義と演習を行った。IIは夏学期で学んだ Study Skills を駆使し、次の段階として実践を行う。戦前、戦中、戦後の日本のある「一年間」を選び(例えば自分の生まれた年)、その年に起きたいろいろなニュースの中から自分が興味をもったものを選び、その報道の仕方、当時の時代的背景、話題性を追求し、その事柄が社会にどのような影響を与えたかを調べた。	それぞれ 夏・冬学期 開講 各30時間
留学生理解と国際教育交流 (横田)	1コマ /週	学部学生	日本の留学生事情と国際教育夏学交流の政策、異文化適応について学んだ。	夏学期開講 30時間
海外留学と国際教育交流 (太田・井村)	1コマ /週	学部学生	ゲスト・スピーカーを招き、海外留学とは何か(意義と目的等)について考え、具体的な準備につなげる。海外の大学との違いや、留学先での異文化適応についても学ぶ。	冬学期開講 30時間
コミュニティ・ビジネス起業 講座 (林・横田)	1コマ /週	学部学生	社会・地域の問題解決をビジネスとして行う起業家育成のための実践的授業(特色 GP 関連授業)。	夏学期開講 30時間

2. 留学生相談部門

③学部教育科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
商学部 比較文化経験論 I (横田)	1コマ /週	主に学部 学生	「自分に気づく」をテーマに、心理テスト、ゲーム、エンカウンター・グループを行った。	夏学期開講 30時間
商学部 比較文化経験論 II (横田)	1コマ /週	主に学部 学生	自分にとって異文化である対象と接触し、その体験を異文化理解ワークショップに組み立てて実施した。	冬学期開講 30時間
商学部 Japanese Business Culture (英語による講義) (太田)	1コマ /週	主に学部 留学生	日本の伝統的なビジネス文化や慣習をホフステードやホールの手法を使って分析する。日本的なビジネス・プラクティスの文化的背景を探る。また、留学生が将来日本企業とビジネスをする際に役立つスキルを学ぶ。	夏・冬学期 開講 各30時間
経済学部 基礎ゼミ ～カウンセリング入門～ (井村)	1コマ /週	主に学部 学生	カウンセリングの基本的な理論を学びながら、心理的困難やストレスに自分で対処できるよう、様々な訓練法を身につける。	冬学期開講 30時間
社会学部 社会・人文の日本語 I・II (河野)	1コマ /週	対象は主 に学部 1, 2年、 研究生、 日研生、 交流学生	留学生センターが独自に作成したテキスト、『社会科学への道しるべ』を精読する。それによって論文特有の表現を理解し、内容を的確に理解する。また、各分野における主要な概念や、論じられている事柄の背景について基礎的な知識を学ぶ。	夏・冬学期 開講 30時間

④大学院科目 (社会学研究科)

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
総合社会科学日本事情 (社会学研究科) (河野)	1コマ /週	主に修士 1年の留 学生	特定の「日本人論」を取り上げ紹介するのではなく、さまざまな「日本人論」「日本文化論」をとりあげる。そしてそれらを自分の身のまわりの日常レベルから再検証してみたり、また批判的に考察する。参加者には自分なりの「日本人論」を考えてもらいたい。	夏学期開講 30時間

(文責：横田雅弘／集計担当：横田・河野・太田・井村・柘植)